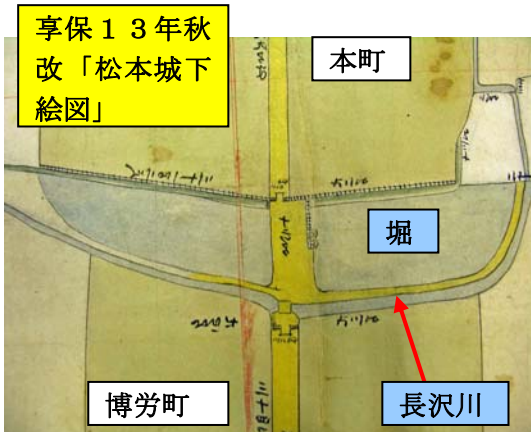


8-4 城下町の川と橋ガイド

1、城下と周辺を流れる河川

城下を流れる河川として、城下の東側を南流して、やがて西流する女鳥羽川（図1）と、薄川の支流で東西に流れる長沢川（図2）とがあった。女鳥羽川によって城下を川南と川北に分けた。また、長沢川によって本町と博労町（馬町、馬喰町とも）の境をなし、袖留堀を形成して南からの敵の侵入を阻んだ。と同時に柵や堀、木戸によって直線道路を前方遮断をして進入を難しくした。

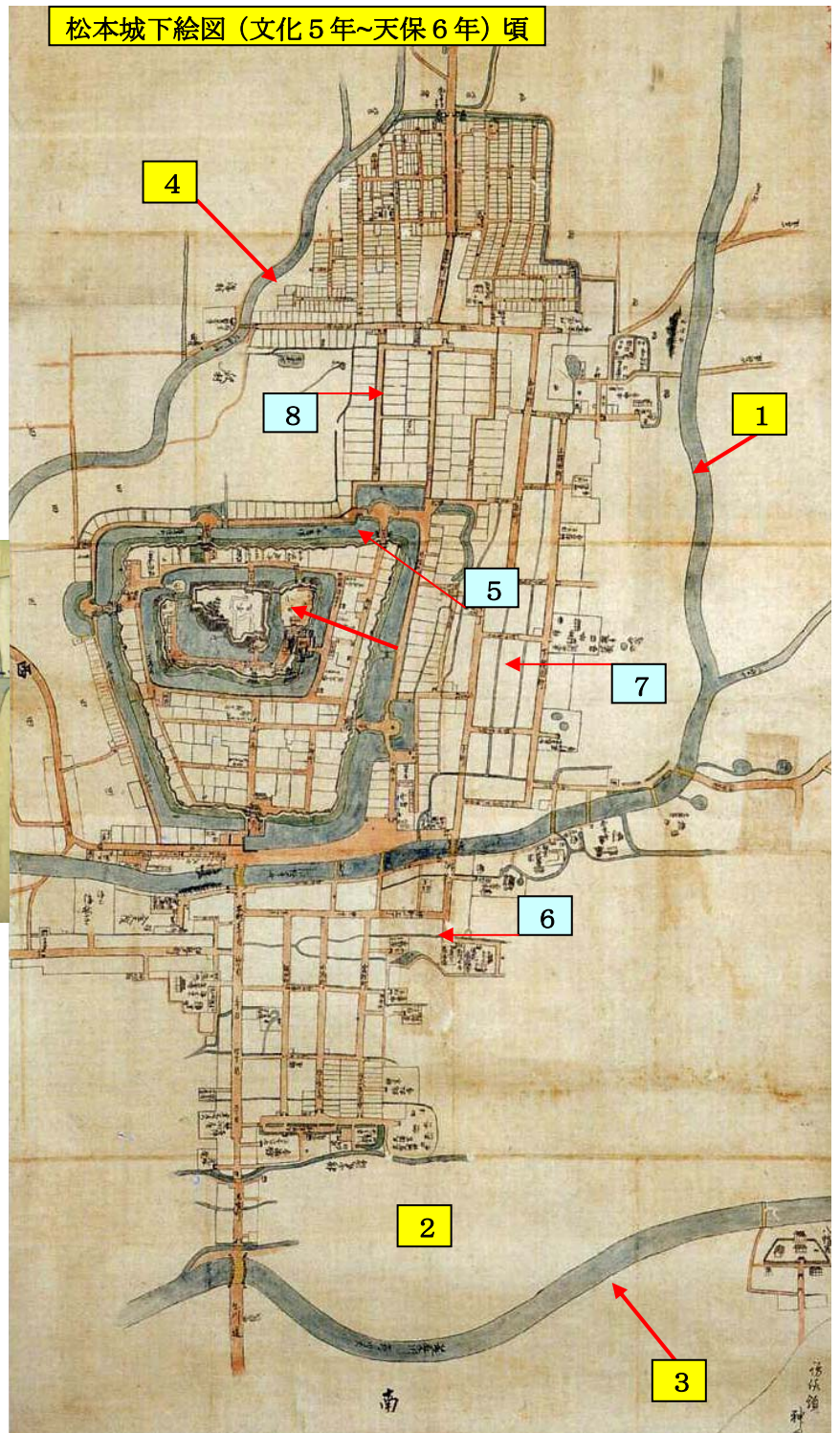


城下の周辺には南部を東から西へと流れる薄川(すすき) (図3)が(筑摩川:つかまがわともいう)あった。城北の武家地を北西に南下する大門沢川(だいもんざわ) (図4)があって、在方(農村)と町方の境界をなしていた。

河川の役割は、外敵を守る機能をもつことはもちろんであるが、武家地と町人地の仕切りであったり、火災発生の際の火除け(ひよけ)地であったりする。また女鳥羽川のように河川交通路として物資の輸送機能をもはたした。このほか河川の水は灌漑用水や生活用水として利用していた。

2、城下町を流れる水路

川南では、源智の井戸付近を水源にして生安寺小路を西に流れる源智川(榛の木川:はんのきかわともいう) (図5)、飯田町と本町の境を南に流れて、やがては田川に流れ込む。蛇川(へびかわ) (図6)は、宮村町・小池町・飯田町を横切り、本町通りを横切り伊勢町の入口で南北に分かれて、



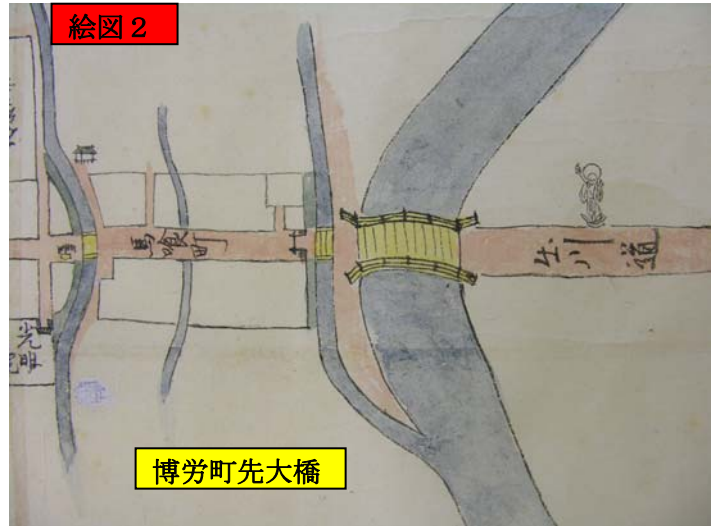
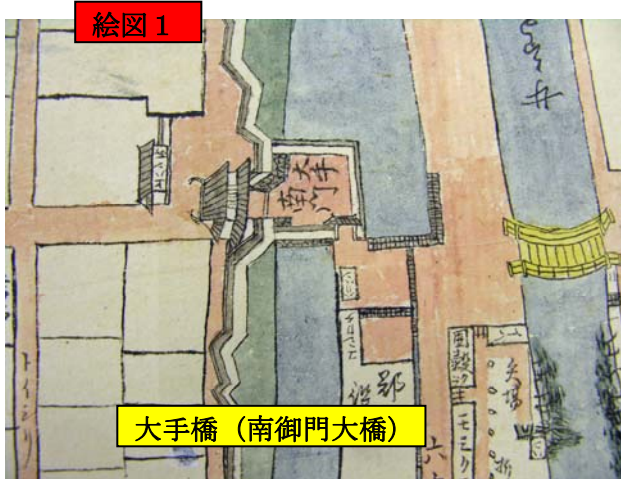
家並の裏側を西に流れて再び合流して女鳥羽川に流れ込む。

川北では、岡宮神社付近の湧き水などを水源として、途中で分かれて和泉町・上横田町・下横田町・東町を南流して、再び一本になって女鳥羽川に流れ込む紙漉川(かみすきがわ)(図7)がある。この水を利用して紙漉きがされていたのでこの名がついたという。元禄絵図をみると、紙漉き屋が一軒岡宮神社付近に存在する。

岡田方面から南流して、安原町を流れ、新町と田町の武家地を通り、松本城堀に流れ込む麻葉川(あさばがわ)(図8)がある。この他にも用水路が網の目のように流れている。

水路の役割は、城下町に住む人々の生活(生活用水の確保)を支えてきたこと、隣接する町との区画を構成してきたこと、発生した火災に対しての備えにもなっていた。

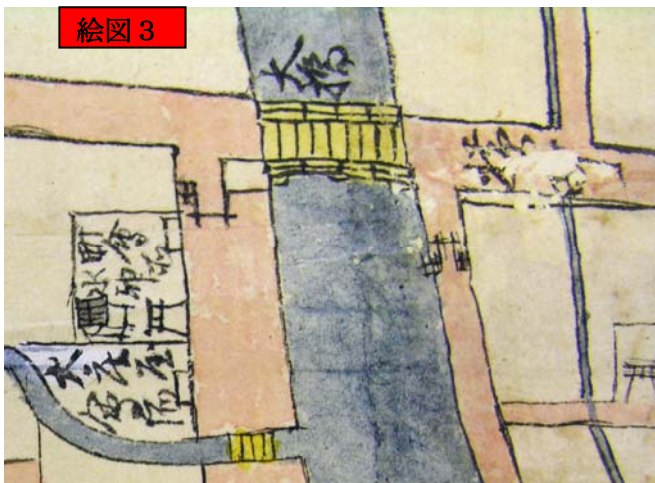
3、城下町の橋



享保10年「松本町帳面」によると、東町大橋(大手橋) 絵図3は長さ8間3尺5寸(約

15, 3m)、幅2間2尺(約4m)であり、絵図3をみれば木橋で欄干付太鼓風の木橋と思われる。絵図2の博労町先薄川に架かる大橋は、長さ11間(約20m)、幅2間1尺5寸(約4m)で欄干付太鼓風木橋と思われる。絵図1の大手橋は、長さ・幅ともに不明である。みるところ木橋で欄干付である(太鼓風)。博労町先大橋と東町大橋は「両所共に土橋領主より掛ル人足ハ町より出申候」とあり、橋の補修や架け替え工事の資材は領主が負担し、人足は町方が負担することになっていた。この土橋は板の上に土をおおいかけた橋、つちばしと思われる。

また、城下には土橋 7ヶ所、板橋 8ヶ所、石橋 13ヶ所とある。石橋は小橋がほとんどで、城下町に架かる用水路の橋の多くがこれであった。石材は、浅間山と山家山から領主が切り出し運び出して、途中水汲(みずくま)村と惣社(そうざ)村からは町人足で運ぶことが規定されていた。



絵図4は、本町・飯田町で蛇川と源智川に架かる石橋と思われる橋である。(享保13年秋改絵図より)